

「将来も使える質の高い学力」を育てる 高等学校の国語科における授業方法の開発

— 国語科のSGH化 —

国語科 岡 かなえ

本校は、文部科学省平成26年度「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」事業で研究開発校に指定され、「北陸からイノベーションで世界を変えるグローバル・リーダーの育成」という構想で研究開発を始めて3年目になる。現在は総合の授業において「地域課題研究」「異文化研究」「グローバル提案」「グローバル・キャリアパス」という4つの課題研究を一貫したカリキュラムとして位置づけており、その方法は確立されつつある。

また、上記の授業を通して養いたい5つの人間力として、本校では、①基礎的教養、②課題対応能力、③英語運用能力、④グローバル・マインド、⑤リーダーシップを掲げている。今回は、この5つの力を国語科の授業においてどのような方法で身に付けさせていくことが可能であるか、総合の授業との関連付けを意識しながらその方法を探っていく。

キーワード：国語科のSGH化 思考力・判断力・表現力を育てる授業 探究型の授業

1. はじめに

私たち教師が授業づくりを考える際、まず生徒の状況を把握することが前提となる。生徒の状況とは、「生徒がどのような知識を持っているか」「生徒はどのような能力が優れているか」「生徒はどのようなことに関心や課題意識を持っているか」「生徒はどのような力を補う必要があるか」などである。そしてそれらを踏まえて、「どのような学力を育みたいか」を考えて授業をつくっていく。

教師が培うべき学力に関して、教育基本法（2006年改訂）では、学力の三要素として、①基礎的な知識及び技能、②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度が示されている。さらに、高大接続システム改革会議「最終報告」（2016年3月）では、上記の学力の三要素の全てを一人一人

の学習者が身に付け、予見の困難な時代に、多様な人々と学び、働きながら、主体的に人生を切り開いていく力を育てるものにならなければならない、と掲げられている。

これらの現状を踏まえて、私が特に育てたい力とは、「将来も使える質の高い学力」である。生徒に知識と技能を身に付けさせるとともに、それを活用して思考し、判断し、表現する力を育てる授業を行うことが求められているといえる。つまり、教科の知識や技能をベースとした質の高い学力を育てることが大事なことであると思われる。

ここで本校の生徒の「将来も使える質の高い学力」について考えたい。スーパーグローバルハイスクール研究開発校である本校では、養いたい5つの人間力として、①基礎的教養、②課題対応能力、③英語運用能力、④グローバル・マインド、⑤リーダー

シップを挙げている。国語科では、①基礎的教養を「語彙力・知識」、②課題対応能力を「思考力・判断力」、③英語運用能力を「表現力」、④グローバル・マインドを「異文化を認めあう姿勢」、⑤リーダーシップを「協働性」と定義した。これらの5つの力こそが本校における「将来も使える質の高い学力」と言えるだろう。以下、それらの力を育てる授業実践の方法を挙げていく。

2. 「将来も使える質の高い学力」を培うための授業実践例

以下に、①基礎的教養（語彙力・知識）、②課題対応能力（思考力・判断力）、③英語運用能力（表現力）、④グローバル・マインド（異文化を認めあう姿勢）、⑤リーダーシップ（協働性）を培うための実践例を一つずつ挙げていく。

(1) 基礎的教養（語彙力・知識）を養うことに重点を置いた授業例

「知識や語彙を増やす」ということを意識し、同じテーマの作品を複数扱うという授業スタイルをとった。

例えば1年生の1学期に扱った「言語論」では、国語総合の教科書にとられている『ものことば』（鈴木孝夫）を導入として、『ことばと文化』（鈴木孝夫）、『言語と記号』（丸山圭三郎）、『言葉と無意識』（丸山圭三郎）、『言語の思想』（田中克彦）、『言語の恣意性』（沢木幹栄）、『言語学とは何か』（田中克彦）の7教材を扱い、より深い知識や教養を身に付けさせるよう工夫した。

また、「言語論」で学習した内容が、違うテーマで学習した時に、「前に学習した内容だな」と、つながりを意識できるような授業展開及び教材選びを心がけた。

(2) 課題対応能力（思考力・判断力）を養うことに重点を置いた授業例

「論理的に読み取る力を育てる」ということを意識し、思考の過程と到達目標を可視化することで、思考力・判断力を育てるという授業を行った。具体的には「到達目標（評価指標）を提示し、思考ツールを用いて考える」という学習活動を設定した。

授業の最初に到達目標（評価指標）を示すことで、学習の見通しを立てさせた。その上で、「ベン図」（比較）、「マトリックス」（比較・整理）、プロット図（構造化）、バタフライ・チャート（多面的・多角的）、「くらげ・チャート」（理由づけ）、「ピラミッド・チャート」（抽象化・具体化）などの思考の型を教えた。最初は何の思考ツールを用いるかを教員が指定するが、徐々に「この問いに対してはどの思考ツールを用いるのがふさわしいか」を生徒が選び、考えて用いられるように指導した。ワークシートを用いて生徒の思考を生徒自身に見えるようにすることで、答えを導く上でのつまずきや、物事を発言する時の根拠の弱さなどに、生徒自身が気付くようになる。

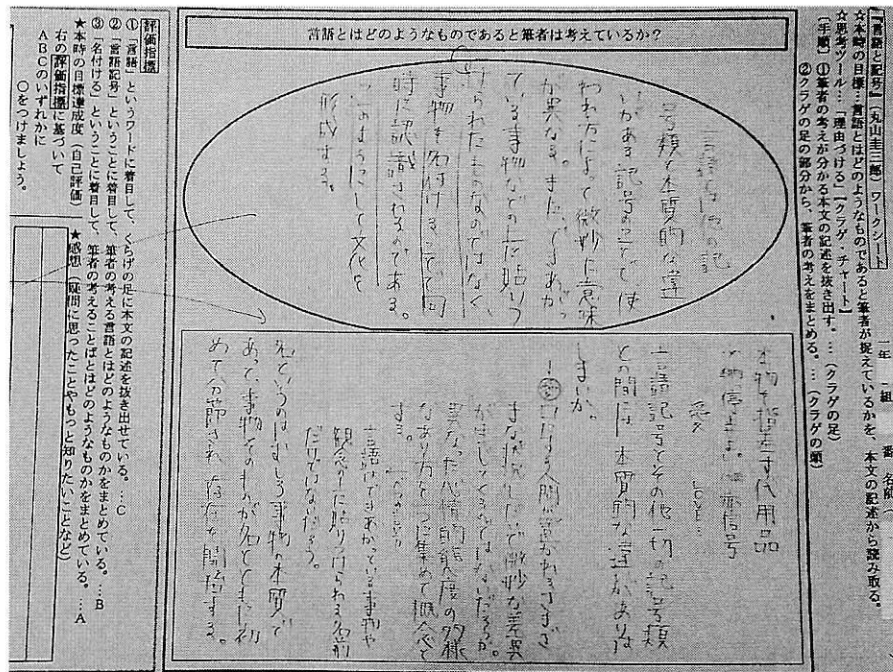
例として、(1)「言語論」で『言語と記号』（丸山圭三郎）を扱った際の内容を挙げたい。まず、「言語とはどのようなものであると筆者は考えているか」という大きな問いを立て、根拠を明確にして読み取るということを意識してまとめさせた。用いた思考ツールは「くらげ・チャート」（理由づけ）である。また評価指標として以下の内容を提示した。

〔評価指標〕

C	「言語」というワードに着目して、くらげの足に本文の記述を抜き出せている。
B	「言語記号」ということに着目して、筆者の考える言語とはどのようなものかをまとめている。
A	「名付ける」ということに着目して、筆者の考えることばとはどのようなものかをまとめている。

なお、思考ツールに関して
は、黒上晴夫（関西大学総
合情報学部教授）、小島亜華
里、泰山裕著『シンキング・
ツール～考えることを教えた
い～』（NPO法人学習創造
フォーラム）を参考にした。

授業で用いたワークシート
は右のものである。「クラゲ
の足」の部分に、本文の記述
を抜き出し、それをもとに、
さらに評価指標を意識しながら
「クラゲの頭」の部分に考
えをまとめた。



【図1】「思考力・判断力」を育てる授業で用いたワークシート



【図2】雑誌ダヴィンチ制作で作成した記事

(3) 英語運用能力（表現力）を養うことに重点を 置いた授業例

「場面に応じて適切に書く力を育てる」という
ことを意識して、雑誌ダヴィンチの制作を行った。
雑誌ダヴィンチとはKADOKAWAが発行する
月刊の総合文芸誌である。その中にある「あの人
と本の話」を作成した。これは、毎月3人の旬な
有名人ゲストがこだわりのある1冊を選んで紹介
する、ダ・ヴィンチ本誌の巻頭人気連載である。

授業ではペアになり、それぞれが取材をする側、
される側の両方の立場になって取材を行った。そ
の際、質問の仕方、話の聞き方、インタビュー記
事のまとめ方などについて自分たちで調べ、考え
ながら進めた。以下に、5時間で実施した授業計
画を記す。

【授業計画（計5時間）】

第1時	雑誌ダヴィンチの「あの人と本の話」の内容を分析する。複数の記事から読み取れる共通点を探し出し、見出しの付け方やどのような内容が書かれているかについて皆で共有する。
-----	---

第2時	自分が紹介したい本を選び、同時に、相手にどのような内容をインタビューするかを考える。その際、具体例を提示して「良い質問」とはどのような質問かを考えさせる。また、インターネットなどを用いてインタビューの方法（話すときの表情・相づちなど）についても調べさせ、皆で共有して練習する。
第3時	実際にインタビュー及び写真撮影を行う。
第4時	インタビュー記事を書く。インタビューのため、書き手の思いなのか、それとも話した相手の思いなのか伝わりにくくなるので、その点に注意するように指示する。
第5時	記事の校正を行う。まずは書いた生徒が文章を見直す。その後、お互いに原稿を見て、分かりやすい文章に直す。

(4) グローバル・マインド（異文化を認め合う姿勢）を養うことに重点を置いた授業例

「日本と外国、昔と今、自己と他者などの比較を通して、違いを認める姿勢を育てる」ということを意識して、「東西比較論」「時間論」を扱った。

まず「東西比較論」では、多面的に物事を捉える視点を育てたいと考え、国語総合の教科書にとられている『水の東西』（山崎正和）を導入として、『日本人の美意識』（高階秀爾）、『ヨーロッパ像の転換』（西尾幹二）、『日本人の庭について』（山本健吉）などを扱い、「東西比較論」についての知識を蓄えさせるとともに、日本と西洋の違いについて、自身の身近な例を挙げて考えさせた。

また、「時間論」では、国語総合の教科書にとられている『余暇について』（内山節）を導入として、

『鏡の中の現代社会』（見田宗介）『時間と自由の関係について』（内山節）、『川の時間』（内山節）、『近代性の構造』（今村仁司）、『塔の思想』（前田愛）などを扱い、「時間論」についての知識を蓄えさせるとともに、現代と近代の違いや都市と地方の違いについて、自身の具体例を挙げて考えさせた。

(5) リーダーシップ（協同性）を養うことに重点を置いた授業例

「班活動を通して、目標に向かって意見をすり合わせていく力を育てる」ことを意識して、「生徒自らが問いを立て、根拠を明確にして論理的に答えを導く」という授業を行った。教材として『山月記』（中島敦）を扱った。この探究型の授業では、教員が教えるのではなく、生徒同士で読み、考える授業を行い、教員はそれぞれの班のペースにあった指導及び個別指導を行った。

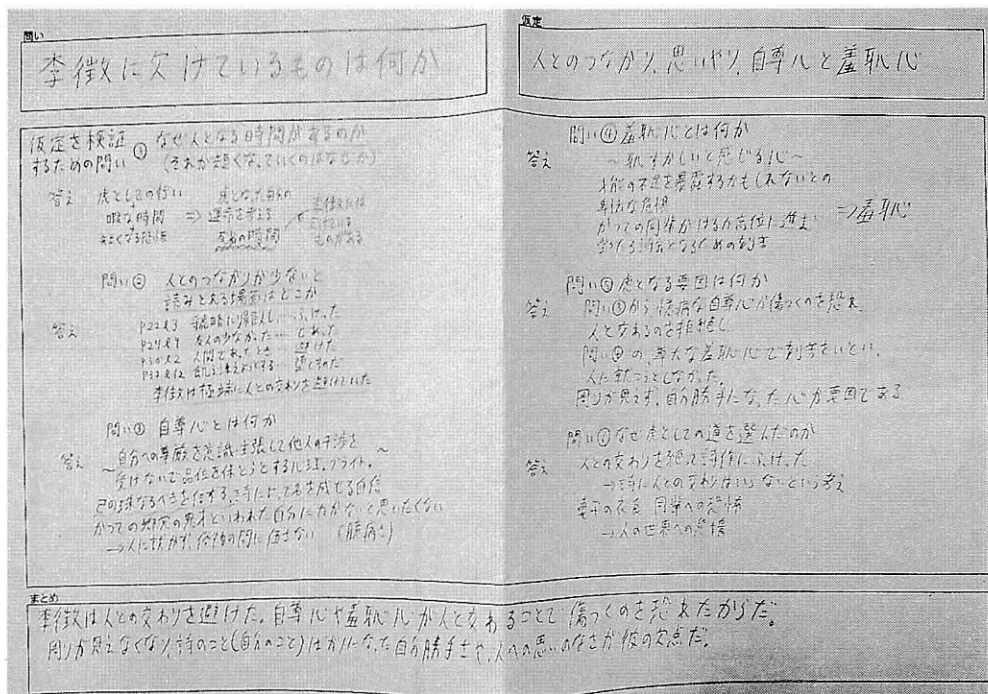
第1次では、「くらげ・チャート」（理由づけの思考ツール）を用いて李徴と袁俊の人物像を捉えさせることで、話の全体像をつかませた。

第2次では、個人で複数の問いを考えさせた後、班で大きな問い（本質をつく問い）を立てさせた。「本質をつく問いとはどのようなものか」ということについては1学期に『羅生門』（芥川龍之介）を学習した際に考えさせている。なお、問いの立て方については、八田幸恵先生（大阪教育大学准授）・渡邊久暢先生（福井県立若狭高等学校）の論文『探究を導く「問い」を設定する能力の育成 高校国語現代文「こころ」の授業研究を通して（2）』を参考にした。

第3次では、第2次で立てた大きな問い及び仮説を検証するための小さな問いを立て、文章の内容に即して考えさせた。また、問いの検証方法については齋藤祐先生（中央大学杉並高等学校）の論文『探究型論文指導におけるアウトラインの作り方一紙と付箋で「探究マップ」一』を参考にした。

第4次では、第3次でまとめた内容をジグソー法で、一人3分程度で発表させた。個人の活動を取り入れることで、一人ひとりの思考を深めたいと考えた。

第5次では、おのおのテーマに沿って800字でまとめさせた。今回は主張と根拠（本文中の記述など）の三角ロジックを意識させた。



【図3】 探究型の学習で用いたワークシート

3. 総合の授業との関連付けについて

現在、本校では総合の授業において1年次の1・2学期に「地域課題研究」、1年次の3学期・2年次の1学期に「異文化研究」、2年次の2・3学期に「グローバル提案」、3年次の1学期に「グローバル・キャリアパス」という4つの課題研究を一貫したカリキュラムとして位置づけている。これらの「内容」及び「養いたい力」において連携することで、本校で養いたい5つの人間力がさらに伸びると考えている。

1年次の夏休みの時期に、総合の授業では「地域課題研究」の学習の中で外部機関への取材を行う。その前に上記の(3)表現力を養うことに重点を置いた実践例で挙げた雑誌ダヴィンチの制作の学習を行った。この学習活動の中で、質問の仕方、話の聞き方、まとめ方についても学習することで、総合とのつながりを持たせた。

1年次の2学期に、総合の授業では「地域課題研究」の学習の中で、班活動で一つのテーマについて調査し、提案するという活動を行う。同時期に、国

語科の授業でも、ペア活動を通して相手の話を正確に聞く力を育てたり、(5)リーダーシップ(協同性)を養うことに重点を置いた実践例で挙げた探究学習行ったりした。総合の授業だけでなく国語科の授業でも班活動を行い、目標に向かって意見をすり合わせていく力を育てる学習活動を取り入れるなど、総合の授業とのつながりを意識している。

1年次の3学期には、「異文化研究」の学習の中で、「食糧危機」について台湾と日本の文化比較に関する学習を行う。それと関連付けて、国語科の授業も農業や里山などについての文章を扱う。教材については国語総合の教科書にとられている『クマの棲める森』(鷲谷いづみ)を導入として、小説の『限界集落株式会社』(黒野伸一)や新聞記事の『無登録農業はなぜつかわれた』(河北新報社編集局)、『里山資本主義-日本経済は「安心の原理」で動く』(藻谷浩介・NHK取材班)などを用いて日本の農業や里山などについての知識を増やしていく。

また、2年次の2学期には「グローバル提案」の学習の中で、「模擬国連」を行い、交渉し、互いに

納得できるような提案をする。その準備として、1年次の3学期には、相手と意見をぶつけ合う力を育てることを意識して、ディベートを行う。

して国語科の授業の教材を選んだりすることで、基礎的教養、課題対応能力、英語運用能力、グローバル・マインド、リーダーシップを育てている。

以下に示すように、総合の内容や育てる力を意識

教科のSGH化 国語科(現代文)の授業で育てる5つの力		基礎的教養	課題対応能力	英語運用能力	グローバル・マインド	リーダーシップ
総合		語彙力・知識	思考力・判断力	表現力	異文化を認め合う姿勢	協働性
卒業						
3年3学期						
3年2学期						
夏休み	学びの設計書			課題に応じた的確にまとめる力を育てる		
3年1学期	学びの履歴書 学びの設計書	知識や語彙を増やし、それらのつながりを意識する		論理展開を意識して書く力を育てる(6400字論文)	世の中のニーズを知り、な上で、自分の立場を明らかにして考える力を育てる	ペア活動を通して、様々な考えを受け入れ、さらに高次の考えを導く力を育てる
2年3学期	英語版グローバル提案	(贈与)に関する知識や語彙を増やし、それを用いる	論理的に思考・判断する力を育てる(自ら課題を発見し深く探究する力の育成)	論理展開を意識して話す力を育てる(ディスカッション)		ディスカッションを通して、人間関係構築能力を育てる
2年2学期	模擬国際会議	文学作品に触れ、歴史的背景に関する知識や語彙を増やし、それを用いる	論理的に思考・判断する力を育てる(問いと答えを論理的に検証する力の育成)	論理展開を意識して書く力を育てる(4800字論文)		
2年2学期	模擬国際会議	文学作品に触れ、歴史的背景に関する知識や語彙を増やし、それを用いる	論理的に思考・判断する力を育てる(問いと答えを論理的に検証する力の育成)	論理展開を意識して書く力を育てる(4800字論文)		
夏休み		ブックレポートの作成を通して知的世界の拡充をはかる		場面に応じて適切に話す力を育てる(ビブリオバトル)		
2年1学期	国際会議弁当	(仕事)に関する知識や語彙を増やす	論理的に思考・判断する力を育てる(問いの答えの導き方)…課題解決能力の育成	論理展開を意識して書く力を育てる(3200字論文)		班活動を通して、様々な考えを受け入れ、さらに高次の考えを導く力を育てる
1年3学期	異文化研究 台湾現地学習	農業に関する知識や語彙を増やす	課題に対して必要な情報を収集する力を育てる	ジャッジする人を意識し、話す力を育てる(ディベート)	違いを認め、な上で、背景を探る力を育てる	ディベートを通して、相手と意見をぶつけ合う力を育てる
1年2学期	地域課題研究	文学作品に触れ、歴史的背景に関する知識や語彙を増やす	論理的に思考・判断する力を育てる(問いの立て方)…課題発見能力の育成	論理展開を意識して書く力を育てる(1600字論文)		班活動を通して、目標に向かって意見をすり合わせていく力を育てる
夏休み	能登現地学習			場面に応じて適切に書く力を育てる(紹介文・依頼文・お礼状)		ペア活動を通して、相手の話を正確に聞く力を育てる
1年1学期	地域課題研究	比較文化に関する知識や語彙を増やす	論理的に読み取る力を育てる(思考の型を身に付けさせる)	つながりを意識して書く力を育てる	日本と外国、昔と今、自己と他者などの比較を通して、違いを認める姿勢を育てる	

【図4】総合とのつながりを意識した5つの力

このように、①基礎的教養（語彙力・知識）は、〈増やす（知的世界の拡充）→つながりを意識する〉と段階的に伸ばしていく。②課題対応能力（思考力・判断力）は、〈読み取る力の育成・情報収集能力の育成→課題発見能力・課題解決能力・検証する力の育成→自ら探究する力の育成〉と段階的に伸ばしていく。③英語運用能力（表現力）は、〈つながりを意識して表現する力・論理展開を意識して表現する力・場面に応じて適切に表現する〉を題材に応じて伸ばしていく。④グローバル・マインド（異文化を認め合う姿勢）は、〈違いを認める姿勢の育成→背景を探る力の育成→世界の流れを把握した上で自分の立ち位置を明確にする力の育成〉と段階的に伸ばしていく。⑤リーダーシップ（協働性）は、〈正確に聞く力→意見をすり合わせる力・意見をぶつける力→高次の考えを導く力〉と段階的に伸ばしていく。

今回は5つの力を分けて整理したが、それぞれがつながりを持ちながら、相乗的に伸びていくと考えている。

4. 「将来も使える質の高い学力」を培うための授業を行った際の、生徒の伸びをはかる方法

これまで、①基礎的教養（語彙力・知識）、②課題対応能力（思考力・判断力）、③英語運用能力（表現力）、④グローバル・マインド（異文化を認めあう姿勢）、⑤リーダーシップ（協働性）を培うための実践例を一つずつ挙げてきたが、その授業を通して生徒の学力は身に付いたのかを検証する方法を提示する。

本校では定期考査の問題に授業で扱った教材を出す

ことはあまりない。例として、(5)リーダーシップ(協働性)を養うことに重点を置いた授業例で挙げた探究学習を行った際の考査問題を挙げる。

問いは、【次の作品『檸檬』(梶井基次郎)を読み、解答用紙の探究チャートを完成させなさい。なお、大きな問いは「なぜ私は丸善で積み上げた画本の上に檸檬を置いたのか」とする。まとめる際は、〔採点指標〕を参考とすること。】である。

採点指標として、①「論理的に検証された仮説(答え)が書けている。」、②「丸善、積み上げた画本、檸檬などに関する(大きな問いを検証するのにふさわしい)小さな問いが複数立てられている。」、③「小さな問いに対して根拠(本文の記述)を明確にして答えを書けている。」、④「小さな問い同士につながりがある場合、それが分かるように記されている。」の4つを提示した。

なお、実際の評価は、①丸善に関する問い、②丸善に関する答え、③画本に関する問い、④画本に関する答え、⑤檸檬に関する問い、⑥檸檬に関する答えの6項目について3段階で評価をした。また、⑦仮説(答え)について、小さな問いとのつながりがあるか、文章表現が分かりやすいか、という観点から5段階で評価をした。以下に評価表を示す。

①丸善に関する問い	5 的確・深い 複数の問い 昔と今の比較	3 問いがある	0 問いがない	①丸善に関する答え	5 深い 自分の言葉で まとめている	3 根拠がある	0 答えがない 根拠がない
②画本に関する問い	5 的確・深い 何の象徴か	3 問いがある	0 問いがない	②画本に関する答え	5 深い 富裕の象徴	3 根拠がある	0 答えがない 根拠がない
③檸檬に関する問い	5 的確・深い 複数の問い 檸檬による私の変化 私にとってどのようなものか	3 問いがある	0 問いがない	③檸檬に関する答え	5 深い 五感 私をどう変えたか	3 根拠がある	0 答えがない 根拠がない
④仮説(答え)・まとめ ・小さな問いとのつながりがあるか ・文章表現が分かりやすいか		1	0	7	5	3	0
*①～③の問いが全てない場合、以下も基準として入れる							
⑤私に関する問い	5 的確・深い	3 問いがある	0 問いがない	⑤私に関する答え	5 深い	3 根拠がある	0 答え・根拠がない

【図5】国語力をはかる評価シート

